

# ロマン主義と近代消費社会

## —コリン・キャンベルの近代思想史の再構成について—

池田成一

さきに筆者は、『消費社会の思想史』の可能性をめぐって<sup>1)</sup>において、消費社会の問題に思想史的立場から本格的に取り組んだ数少ない著作の一つであるコリン・キャンベル『ロマン主義の倫理と近代消費主義の精神』<sup>2)</sup>を扱ったが、その際には紙幅の不足のために、主にその前半を扱うにとどまった。本稿においては、その後半をなす近代思想史のキャンベルによる再構成を紹介しその問題点を論じてみたい。

### 一、キャンベルの議論の紹介

前稿で確認した通り、キャンベルの著書の前半の要点は次のとおりであった。第一に、今までの消費社会論のほとんどが採用していた三つのアプローチ、即ち、自己実現を求める本能にたよる「本能主義」、宣伝・広告による消費者の欲望の操作に訴える「操作主義」、ステイタス・シンボルを求める競争から説明する「ヴェブレン風の見方」は、それぞれ一定の妥当性はあるとしても、それだけでは近代消費主義の歴史的固有性を説明することができない。そこには何か決定的な要因が欠けている。近代の産業資本主義が、単なる金銭欲や競争によっては説明できず、ウェーバーが示したように、「世俗内禁欲」や合理化という近代的資本主義の特性と、それを倫理的に正当化したプロテスタンティズムという思想的要因を考慮する必要があったのと同様である。従って、近代消費主義についてもウェーバーに倣った考察を試みるべきである。第二に、近代消費主義の本質は、想像力の巧みな使用による「情動」の

操作から快楽を引き出す「自律的想像的快楽主義」にあり、感覚の種類や強度をコントロールする「伝統的快楽主義」とは本質的に異なる。

キャンベルは以上の前提に基づき、後半において、近代消費主義を倫理的に正当化した思想であったと彼が主張するロマン主義の思想史的再構成を行なう。ここで展開されている議論は対象も非常に広範囲にわたり、論じられている問題点も多いが、キャンベルの狙いは大きく二つに整理できる。

第一に、「自律的想像的快楽主義」を正当化する思想の発展を、プロテスタントイズムから十八世紀のセンチメンタリズムを経てロマン主義にまで至る近代思想史の中に探ることである。第二に、ウェーバーの近代思想史把握に方法論的に倣いながら、ウェーバーが無視した近代思想史の裏面を探り出すことによって、ウェーバー的な生産中心主義的な近代像を補完あるいは修正することである。ウェーバー的近代像が、近代消費社会を把握することを困難にしていたからである。キャンベルは時代順に叙述を進めながら、密接にからみあったこの二つのことを同時に遂行しようとするのである。

### 1) ピューリタニズムにおける情動主義の発生とその正当化

「第6章 もう一つのプロテスタントの倫理」は、プロテスタントイズムの中に、ウェーバーの描いたものとは異なった線、将来の「自律的想像的快楽主義」への発展傾向を見出すことを課題にしている。ウェーバーの分析は実質的に十七世紀で終わっており、その後に出現した復興運動である敬虔主義とメソヂイズムにも本質的な発展を認めず、十八世紀以降はつまるところプロテスタントイズムのエートスの緩慢な没落と腐敗、最後には世俗的功利主義にゆきつく過程とみていた。キャンベルももちろんこのような線が存在していることを認めるのであるが、別の発展傾向として、カルヴァン派内部に発生したアルミニウス主義から出発して、ケンブリッジ・プラトニストとライプニッツ的神義論に至るプロテスタントイズムの流れを見出すのである。

キャンベルによれば宗教に可能な「神義論」のタイプは、カルヴァンの予定説を含む「メシア的終末論」、マニ教に典型をみる「二元論」、因果応報の思想にもとづくインド的「カルマ説」というウェーバーが整理した三つに尽

きるわけではない。「可能世界の中で最善のもの」というライブニッツの議論に典型をみる「オプティミズム」も可能な神義論の形態なのであり、しかもこの形態がプロテスタンティズムの中に発生したことが重要なのである。

神が道徳的存在ではなく、まったく利己的な存在とされてしまうという、カルヴァン主義の予定説の「非人間性」に対する批判は、すでにオランダのカルヴァン主義の内部にアルミニウス主義という形をとって発生していた（ウェーバーが見落としていることだが、メソディズムの創始者ウエズレーもアルミニウス主義者であったことが注意される）。しかし、イギリスの中でこの傾向が開花するのは、ピューリタン革命の不寛容、狂信、セクト主義を経験した後の、ヘンリー・モアに代表されるケンブリッジ・プラトニストたちにおいてである。彼らはプラトン主義を導入することによって、神の意志の上に道徳的価値を置き、また、神の恩寵にかえて、神の愛、および人間の「同感、仁愛、同胞感情」を強調した。ここでは、カルヴァン主義とは対照的に、神の似姿としての人間という思想が中心的役割を果たす。しかしこれは、カトリシズムへの復帰を意味するものではなく、プロテスタンティズムの世俗的価値への敵対傾向、強固な道徳性、内面性は継承しながら、カルヴァン主義の神学を拒否する新しい「キリスト教的ヒューマニズム」の登場を意味していた。この結果、新しい神学、神義論が要求される。この要求に答えたのがライブニッツであった。

しかし、このプロテスタンティズムの新しい形態において重要なのは、教義そのものではなく、その帰結として、「情動」に価値が置かれるようになったことである。この点について、キャンベルはウェーバーが重視した「しるし」の問題を手がかりに論を展開する。ウェーバーによれば、宗教的信念・教義と社会的行為との関係は、直接的・教訓的ではない。実際にカルヴァン主義者の行為を導いたのは、予定説の教義が喚起せざるを得ない不安を克服しようとして、自分が恩寵の状態にある人間であることを確信できる「しるし」を求めることであり、これによって予定説は、一見そう予想されるような受動的宿命論ではなく富の能動的な追求につながっていった。これと平行的に、ケンブリッジ・プラトニストたちにとって問題だったのは、神の似

姿であるはずの「自分の中の神性を悟るためには何をすべきか」「どうやって、自分が徳ある人間であることを確信するか」であった。ここでは「しるし」は、自分が他人の苦しみに敏感であるという「キリスト教的感受性」を持っていることとなる。一種の「情動」が、善人であることの「しるし」とされたのである。しかも、後の快樂主義の正当化という点で重要なのは、この「仁愛」には快樂が伴うとされたことである。「良い人間が善行をするときに感じる喜びと満足に比べられるような感覚的快樂は存在しない」(ティロットソン)。ここにはある論者がいうように「エゴイズムの快樂主義」が端緒的に現れているともとれるが、さしあたっては情動的快樂主義の「利他主義」的形態が成立していると言える。ここで確かに、他人の苦しみに同情することは快樂ではなく苦痛を増すことではないかという疑問も生じようが、しかし、この苦痛もまた快樂の源泉となるのであり、それもまた、近代的快樂主義の一要素を形成することになる<sup>3)</sup>。

ここでキャンベルは翻って、カルヴァン主義そのものの中にも情動主義の要素を見い出していく。まず予定説そのものが生み出す濃密な「情動」の存在がある。それはウェーバーも認めるような「先例のない孤独の感情」「苦悩」であり、バートン『憂鬱の解剖』が「ピューリタンの病」とよんだ「メランコリー」の感情であった。それを感じることは、選ばれていることの「しるし」でさえあった。このことはウェーバーにおいても認知されているのであるが、ルターとカルヴァンを、「神の容器説」対「神の道具説」の二分法に基づいて対立的に理解したために、カルヴァン主義の反「情動」的要素(＝合理主義的要素)が過度に強調されてしまったのである。その上さらに、特にピューリタンの間には、この「情動」の「しるし」を外に向かって表現することをよしとする傾向が生まれる。それは、選ばれた者もそうでない者も包括する「見える教会」は、選ばれた者のみからなる「見えざる教会」とは異なるとするカルヴァンの教えに反して、イギリスのピューリタンの間にその名のとおり「純化」傾向が生じ、「見える教会」をできる限り「見えざる教会」に近づけようとする努力が生じたことに起因する。そこで教会のメンバーを選別する必要が生じるが、そのためには、単なる信仰告白では不十分であ

り、また善行も偽善を排除できないことから、「情動」を外に表現することが次第に重要視されるようになったのである。ここからバニヤンに代表されるようなピューリタン文学も生まれた。

このカルヴァン主義の特殊な発展と、ケンブリッジ・プラトニストの「仁愛崇拜」とは、異なる種類のそれに重点をおいたとはいえ、平行しながらともに近代人の「情動」の発達に寄与した。それだけではなく、一旦予定説の教義が放棄されることになると、二つが合流、あるいは交錯する可能性がでてくる。そこで十八世紀には、ケンブリッジ・プラトニストの築いた土台の上で、カルヴァン主義の「しるし」の教義が「楽観主義的」「情動主義的」に解釈された結果、センチメンタリズムが登場することになるのである<sup>4)</sup>。

## 2) 十八世紀のセンチメンタリズムにおける感情と快楽と美

「第7章 感情の倫理」において、その十八世紀が扱われる。キャンベルはまず、十八世紀が「理性の時代」であったというのは事の半面でしかないとを指摘する。外界の「脱魔術化」は必然的に内界の「再魔術化」を伴うからである。従って「理性の時代は必然的にセンチメントの時代である」(C138)ことになる。ここに登場するのが、「感受性崇拜」としてのセンチメンタリズムである。例えばローレンス・スターンに見られるように、「感受性」は、カルヴァン主義の恩寵と同じように、一種のカリスマ性をもおびた「神からの贈物」とされた。またスターンの読者も、それに感動することによって自分が善人であることを確信できた。すなわち、「情動的快楽主義」が倫理的に正当化されたのである。実際、当時の文献の多くが、慈悲、悲哀、仁愛、愛情、恐怖から得られる「快楽」について言及しており、「贅沢(luxury)」という言葉もその文脈で使われていたのであった。

キャンベルはさらに、ジェーン・オースティンの小説『センスとセンシビリティ』(『分別と多感』などと訳される)を分析することにより、センチメンタリズムの特性として、「情動から得られる快楽のゆえに、それにひたる準備ができていないこと」、「求められた情動を喚起するような幻影的環境を想像するために、想像力を使用する近代的能力」、「力強い情動を表現することが

義務である」という道徳的意識などをあげる。この道徳的意識は、感情を示さないのは感情の欠如のしるしであり、感情の抑制もむしろ悪徳であると考えられる結果、社会的慣習の無視または否定に至る。他人がどう受け取るかよりも、自己に対して「誠実(sincere)」であることが優先されることになる。ここからキャンベルは、センチメンタリズムは禁欲的ピューリタニズムに負けず劣らず「内面性重視」であるというのである。それが「内面性重視」であるというもう一つの根拠は、想像力への依存にある。感覚ではなく、想像力によって形成される私的内的な世界に没頭できる能力が問題となっているからである。ここでキャンベルが言いたいのは、近代的消費主義が単に他者志向的な「模倣と競争」から起こったものではないことである。「確かに、全ての社会的行為には模倣の要素があるが、中産階級の性格理想の中では、他者からの是認への方向付けは自己尊敬よりも重要ではない」(C144)。

しかし、近代消費主義の発展の中で決定的であったのは、センチメンタリズムに顕著に見られる美的感受性の意義の増大であった。もともと、十八世紀初めの美学を支配していたのは、ルネサンスに起源をもちながら、啓蒙主義の影響を受け、美の普遍的規則を古典の中に探ろうとする新古典主義であった。しかし、この規則を重視した新古典主義の伝統は、それと結び付いた情動の抑制を善とする「貴族主義的」性格のために中産階級にはアピールしなかった。けれども、中産階級の一部はこの伝統に対する尊敬を失わず、この両義的態度から新しい美的態度の探求が生じたのである。この探求の目標は、貴族的態度への批判と、「卑俗(vulgar)」であるという非難を避けることを同時に達成することであった。そこに起こったのが、フェアチャイルドがごろ合わせ的に middle-classicism と名付けた、「新古典主義的美学とプロテスタンティズム的態度の合体」であった。

この方向に道を開いたのは、自らは貴族主義者でありながらケンブリッジ・プラトニストを継承したシャフツベリであった。シャフツベリは、徳性を情念と感情の問題として捉え「道徳感情」という概念を導入しただけでなく、調和の観念を媒介にして道徳感情と美的感覚とを結びつけてみせた。決定的なことは、ここで美と感情の結び付きが起こった結果、新古典主義で強調さ

れた合理的規則の重要性が後退し、美から得る快樂が徳の指標となったことである。これが発展して行くと、最後には逆に、快樂の感情を引き起こすものが美であり善であることになり、典型的には『センスとセンシビリティ』のマリアヌスがそう考えているように、美的感受性の欠如は道徳的墮落と同義となるのである。即ち、美的「趣味」がもっとも重要な「しるし」となる。キャンベルによれば、十八世紀においてますます感じられるようになった「消費への強制」(マッケンドリック)は本質的には道徳的な性質を持っていたのであって、ピューリタンの末裔たちは、彼らが道徳的であったからこそますます「流行を追う」ようになったのである。

十八世紀において初めて美学上の重要性を獲得した「趣味(taste)」の問題は重要である。この言葉は語源からいっても、美と快樂との関係を暗示しているからである。思想史的にみると問題の焦点は、「趣味」をめぐる議論がすすむにつれて、「味覚(趣味)については論じるべからず(de gustibus non est disputandum)」という原則がしだいに美学にも適用されるようになったことにある。これによって新古典主義が批判にさらされ、美が主観化され相対主義化されてくるのである。けれども注意しなければならないのは、完全な美的相対主義は一見したところ、個人の自己決定という近代消費主義の本質に合致しているように思われるにも関わらず、実は、近代消費主義のシステムに固有のダイナミズムを破壊することになってしまうことである(もちろん完全な美的相対主義に至る傾向も存在したが、それは結局、単純な俗物根性に向かう傾向がありベンサム流の功利主義へと帰着してしまうのである)。ダイナミズムが保持されるためには、「趣味」にはあくまで倫理的要素が存在していなければならない。実際十八世紀には完全な美的相対主義の主張は少ないのであり、大部分の場合、「洗練された(refined)」趣味の存在が主張されているのである。

このような環境の結合、即ち、個人の価値を表現したいという強い欲求(ジェラードの言ったように「すべての人間はよき趣味の人と思われることを欲している」と、それが則るべき新しい美的基準の不在とが、近代的「流行」の成立を促した一つの条件である。もう一つの条件は、情動的快樂を刺激する

ための「新しさ」への欲望であり、「流行」とは、社会学的必要（統一的基準の必要）と心理学的必要（新しさ）を共に満たすという問題への「事実による（de facto）解答」であったとキャンベルは考えるのである。

しかしここで十八世紀の過渡的性格が強調される。十八世紀には、情動的感受性の方を強調する「中産階級の美学」と、「熱狂」の中に卑俗なものを見て抑制と洗練を強調する「貴族的美学」という本来相いれない二つの美学の対立が潜在していた。確かにセンチメンタリズムにおいては、『センスとセンシビリティ』にみられるように、強力な感受性と洗練されたマナーの優雅さの両方が共に強調されているがこれは二つの方向の混交であって、十九世紀にはこの潜在的矛盾が顕在化し、ボヘミアンのロマン主義とダンディズムのストア主義的マニエリズムとの対立へと純化されるのである。

### 3) ダンディズムの位置づけ

近代消費主義の成立の歴史的叙述において、ダンディズムに大きな役割が与えられることがしばしばある。しかしキャンベルはロマン主義を強調する立場から、「第8章 貴族的倫理」においてこの傾向に反論している。

ダンディズムは、ルネサンスの貴族的道徳の継承者である。ルネサンスの「宮廷人」の理想がイギリスにも伝承され、王政復古後の「騎士道徳」となる。この道徳は、「名誉」の観念の優越のため、一般に快楽よりプライドを重視する「他人顧慮型」であり、抑制され洗練された行動に対するこだわりから情緒の過剰を避ける。この貴族的特性は、ストア主義の「アパテイア」の理想に結び付き、古典主義美学とも親近性を有する。ここから、貴族的行動につきものの様式化されたスタイルへの拘泥、「マニエリズム」がでてくる。確かに、貴族には「放蕩」がつきものではないかとの疑問も起こるが、キャンベルによれば、放蕩は必ずしもストア主義とは矛盾しない。放蕩は「感覚的快楽」は与えるであろうが、ストア主義が反対するのは「情動」であり、放蕩も「男らしさ」、即ち「強さ、スタミナ、意志力、自己コントロール」の表現と見なされるのであって、「情動」の表現ではない。とすれば、「自律的想像的快楽主義」を本質とする近代消費主義においては、貴族的倫理は「近

代消費文化に適合するように適宜変更を加えることはできるが、それ自身から近代消費文化を生み出す力はほとんどもっていない」(C163)。

ダンディズムを創始したとされるブランメルなどの行動様式を範例として調べてみると、そこには「情緒的不感症と肉体的敏感性の不可思議な結合」が見い出される。「ダンディズムは、変化した環境からの挑戦に応じた伝統的貴族的価値と理想の再加工とみることができる」(C170)。決定的なことは、ダンディズムにおいても「洗練」という新古典主義美学が支配的だったことであり、「快樂」に価値が与えられているわけではないことである。

#### 4) ロマン主義

このようなダンディズムに対して、ロマン主義こそが近代消費主義に適切な土台を与えたと、「第9章 ロマン主義の倫理」は論じる。センチメンタリズムは、ゴシック小説なども生み出し、「喜ばしい恐怖」のような想像力によって媒介された情動的快樂の新たな型を登場させていくが、時とともにその情動の表現が芝居じみたものへと退化した結果、「不誠実」と「猫被り」という非難を受けて評判を落とすことになった。思想的にみたロマン主義の決定的重要性は、この情動的快樂への欲望の高まりを正当化する新たな思想をセンチメンタリズムに代わって与えたことにある。

ロマン主義は、センチメンタリズムの「偽善」「猫被り」を真の感受性の欠如、伝統的価値へ譲歩した結果として説明し、ケンブリッジ・プラトニストからセンチメンタリズムに受け継がれた情動的感受性と善性との結合は継承しながらも、社会的慣習との対立を深めてゆく。しかし、産業革命とフランス革命を経由したロマン主義の時代には、社会的慣習を代表する敵は既に貴族ではなく、中産階級内部の敵、功利主義的「俗物」となる。このようにして、十九世紀を規定してゆくことになる功利主義対ロマン主義という対立が生じる。

キャンベルによれば、功利主義とロマン主義の闘争は、プロテスタンティズムという共通の地盤から生じた一種の「兄弟喧嘩」である。功利主義がウェーバーが描いたようなピューリタニズムの合理主義を受け継いだとするなら、

ロマン主義は、ピューリタニズムやケンブリッジ・プラトニストの情動主義と、ライプニッツ的神義論の継承者である。ただしロマン主義における発展は、「愛」に加えて、万物の創造者である神の似姿としての、「天才」の「創造性」という新しい理念が生まれ、ここから唯一性・個性が強調されるようになったことである。また、ライプニッツから自然の善性という観念を継承しているが、自然の感情は社会的慣習の束縛からの解放として解釈され、自然を超自然の位置にまで高めることになる。エイブラムスのいう「自然的超自然主義」である。これらの要素からロマン主義の新たな「神義論」が形成される。あたかもピューリタニズムが復活したかのように、功利主義にまみれた「罪深い」世界を断罪する預言者的態度が生まれ、墮落した現世に対して想像力によって喚起される理想的な完全世界が対置される。想像力の欠如が社会悪の根本原因とされるのである。芸術的想像力による社会の革新というロマン主義の道徳的ヴィジョンが成立する。

想像力による情動的快楽の正当化という点では、例えばワーズワース等が快楽を積極的に位置づけている点が重要である。ワーズワースによれば、自らの情熱に対して快楽を感じる事が詩人の特性であり、もし自然から快楽を感じないとしたらそれは彼らの疎外の結果なのである。ワーズワースはまた、情動の創造における想像力の役割を詳しく述べている。しかし、ワーズワースの述べる情動＝快楽はまだセンチメンタリズムのそのように限定されたものであったが、キーツは、この情動を恐怖・苦痛などを含む範囲にまで拡張した。ロマン主義を特徴づけるものとしてマリオ・プラーツが詳細に描いた「ロマンティック・アゴニー」が始まるのである。これはキャンベルによれば、「安楽」とは異なる近代消費主義的「快楽」の特性を端的に示す重要な要素であり、ゴシック小説などによる近代的情動の発展の結果でもあった。

ロマン主義はさらに、ボヘミアンという注目すべき生活様式を生み出す。ボヘミアンはそのほとんどが、中産階級の出身者でありながら自発的に世俗的成功の道を捨てた者たちであり、自己の誇りのためには貧困をも感受する、ほとんど修道士にも似た存在であるが、かといって「快楽」を避けるわけで

はない（忌避されたのは功利主義的「安楽」であった）。即ち、ボヘミアンには、ピューリタンのように俗世間に対立する態度と「快樂主義」の共存があるのである。未来の芸術家たるボヘミアンたちが作る集団は、近代消費社会の一種の「実験場」なのであり、そこでの新たな「快樂」の発見が近代消費社会をリードしていったとキャンベルは言うのである。

#### 5) ロマン主義と消費主義

このようにしてロマン主義は現代まで続く一種の伝統となり、近代消費社会の最も重要な内的成分となる。しかし、このロマン主義と近代消費社会との関係は単純なものではない。「第10章 結論」においてキャンベルは、この両者の関係を「社会的行為のアイロニー」として記述している。ロマン主義者は当然ながら快樂的消費主義を肯定しようと思っていたわけではなかった。それどころかワーズワースなどはゴシック小説などの快樂の誤用に反対し、その誤用を功利主義のせいにした。ロマン主義と消費主義の関係は、ちょうどドルターやカルヴァンと資本主義との関係に等しく、直接の志向とは別のものが実現するという意味で「アイロニック」な関係なのである。しかしロマン主義美学は、例えば新古典主義美学に比べてはるかに大衆の趣味に近づいたものであり、また芸術による道徳的再生という主張は、民衆の趣味を考慮させると同時にその聖性をも保証した。それが、ロマン主義美学が消費市場の中で生き残ることを可能にしたのである。しかし、ロマン主義は単なる消費主義のイデオロギーではない。その結果、いやおうなく消費市場にとりこまれた芸術家の中には、「理想」と「物質的利益」の緊張、社会学的には、fine artist と commercial artist の対抗と相互依存の関係が発生することになる<sup>5)</sup>。またこの「アイロニック」な関係は、「理想」が単なる「物質的利益」に退化するだけの一方向的な関係というわけではない。逆に、一九六〇年代の対抗文化運動に典型的に見られたように、単なる快樂追求がロマン主義的理想主義を生むこともあるというのである<sup>6)</sup>。

#### 6) ロマン主義とピューリタニズム

同じ第10章は、ロマン主義とピューリタニズムの関係については、次のようにまとめている。この二つを通例のように対立的とだけみるのは誤りである。ロマン主義もピューリタニズムから派生したものであり、ロマン主義が敵対したのはカルヴァンではなくフランクリンだったのである。プロテスタンティズムの内部に、それぞれ功利的合理主義とロマン主義に発展する二つの流れの存在を明確に認めることが何よりも必要である。しかし、一種の「兄弟喧嘩」の関係にあるこの二つは、内的につながりあっている。確かに、この二つの倫理が理想とするタイプには顕著な違いがあり、理論的には同時にこの二つの倫理に同調することはできないはずである。けれども実践においてはそれはそれほど難しくはなく、中産階級の個人の内部には、むしろこの二つが「相補的」に存在するほうが普通であるというのである。ダニエル・ベルが述べたような「文化的矛盾はたやすく社会的両立可能性になりうる」(C223)のである。二つの態度および信念は、時間的・空間的に分離できるならば両立可能である。この二つのエートスの相補性が、経済における生産と消費の相補性に対応していることはもちろんである<sup>7)</sup>。

## 二、問題点

以上、キャンベルの議論を詳しく紹介することに重点を置いてきた。近代消費社会とロマン主義との歴史的関係を思想的に再構成しようとする彼の議論は人の意表をつくところがあり、細部にまでわたって紹介しなければ彼の主張を理解し評価することができないと思われたからである。しかし最後に、筆者なりの評価を与えておきたい。

キャンベルの議論で最も評価される点は、近代消費社会論を手掛かりとすることによって、今まで軽視されていた思想の流れを発掘し、しかも、それを非常に大きな展望の下に示したことであろう。それは生産中心主義的視点が依然として支配的である近代思想史に大幅な書換えをせまるものとなっている。これに関連してさらに注目されるべき点は、思想的に自明なもの

して無批判に前提されてきた功利主義とロマン主義と対立について、いわば「発生的批判的方法」(フォイエルバッハ)を用いることによって、その硬化した対立をつきくずし、流動化させている点である。これも、近代思想史に対する大きな貢献と言えよう<sup>8)</sup>。

けれどもキャンベルの議論でもっとも大きな疑問点となるのは、近代社会を見る視点としていわばピューリタン中心主義がとられている点であると思われる。最近のイギリス史研究においては、特に「ジェントルマン資本主義論」などに見られるように、ピューリタンの役割を限定的に理解する傾向がむしろ強くなっているように思われる。それに応じてか、十八世紀の消費社会の発生について論じられる場合でもマッケンドリック等に従って「ヴェブレン風の見方」が採用される場合が多い<sup>9)</sup>。この場合、ピューリタン直系の中産階級ではなく、貴族を含むジェントルマン階級の指導的役割が強調されることになる。

これに対してキャンベルは、上昇志向に基づいて上位階層の「見せびらかしの消費」を模倣する競争は確かに存在しただろうが、革新の導入が「有閑階級」からではなく中産階級からくることは、十九世紀のボヘミアンが新しい快楽を発明する「実験場」であったこと、十八世紀においても近代快樂主義を最もよく現わす小説の消費の流行などは中産階級から始まったことをみても明らかであると主張する。「見せびらかしの消費」に走りやすいのは実は「成り上がり者」であるが、彼らが「テイスト・メイカー」として頼るのはヴェブレンのいう「有閑階級」ではなく、建築家、インテリア・デザイナー、ファッション記者などであり、後者の存在はロマン主義のイデオロギーによって支えられている。「有閑階級」の「見せびらかしの消費」は、中産階級から起こる革新に対する防衛的なものにすぎず、自分から革新を起こすことはできないというのである(以上、キャンベルの第3章)。

十八世紀の消費社会の発生において、中産階級と貴族階級のいずれが主導的役割を担ったか、あるいはジェントルマンと言われる人々の中で、そのどちらの要素が優っていたかについては社会史的な実証的研究が必要であり、筆者はそれを判断する能力を持ち合わせない。しかしキャンベルの説明によつ

ても、近代消費社会には不可欠である美的趣味の契機が十八世紀に重要性を獲得するには、シャフツベリに代表される「貴族主義者」の存在が重要であったはずである。中産階級も自分たちが「卑俗」でないことを示すためには、「貴族的」契機を取り入れざるをえなかったのである。このことは、十八世紀に進行したとされる中産階級のジェントルマン化という事態に対応しているようにも思われる。

けれどもキャンベルは、ルネサンス以来の「貴族主義的倫理」は、本質的に情動や想像力に対して敵対的なストア主義的なものであり、美学的にも新古典主義に傾斜したために、近代消費主義に道を開くことはできなかったという。しかし、ルネサンス思想は果してキャンベルのいうようにストア主義に収斂するものであろうか。むしろルネサンスの主流思想は新プラトン主義だったはずであり、この中では、善と美の本来的一致の思想と共に、想像力の賛美も芽生えているのである<sup>10)</sup>。

ここで想起されるのは、十八世紀後半以降のブルジョアジーに特有の思想として、「文明」の理念をあげることができるということである。この理念はエリアスの『文明化の過程』が示したように、ルネサンスに起源をもつといえようが、その中には「趣味の洗練」という思想も、礼儀作法の発達と並んで含まれていた。この「文明」の思想を単に貴族主義ということとはできないはずである。決闘に代表されるような「名誉」を重んずる貴族の伝統的倫理は、「文明」の立場からは「野蛮」として排撃されるからである。この点では「文明」の思想は中産階級の貴族攻撃のための武器となる。その一部をなす「趣味の洗練」という思想は、ロマン主義が重視した「個性」の思想と並んで近代消費主義に欠くことのできない要素であろう。もちろんロマン主義に色濃く規定された十九世紀においては、「文明」が功利主義的社会と等置され、ロマン主義の名の下で反文明思想が唱えられたという事情がある。しかし、それこそロマン主義と功利主義という十九世紀特有の硬化した対立の下での発想であり、本来「文明」の思想を功利主義的実利主義と等置することはできないであろう。「文明」の思想もロマン主義と並んで、近代消費主義を倫理的に正当化した思想として登録されるべきではなかろうか。

こう考えるとキャンベルの中にはやはり、宗教改革中心主義という、議論全体をウェーバーに倣ったために生じた歪みがあるように思われる。そのために、ルネサンス＝他者志向的＝貴族主義的、プロテスタンティズム＝内面志向的＝中産階級的という単純な図式が立てられ、そこから近代思想史が解釈されている。このような図式の無理は「流行」現象の解釈の中に端的に現れるように思われる。元来、「流行」現象はジンメル有名な議論にみられるように、個性と社会化の両契機の弁証法的運動とみられるのが普通である<sup>11)</sup>。しかしキャンベルは以上の図式のために、社会化＝模倣の要素を切捨て、専ら「個性」による「革新」の要素を近代的「流行」の本質とみなす。けれども、「流行」に不可欠の他者の模倣の契機は、ヴェブレン的な「見せびらかしの消費」、あるいは「成り上がり者」の俗物根性という、倫理的には正当化されえないものからしか解釈できないのであろうか。「文明」の思想に従えば、この模倣自体が「文明化」に参加することとして倫理的にも正当化されると考えられる。また、この模倣を単に他者志向的とみなすことができるだろうか。例えば、スミスの同感理論によるならば、社会化の原動力である、同感したい同感されたいという同感本能は、想像力という、キャンベルによるならば内面的自律的な能力を発展させることになるはずである。この点で、他者志向性と内面志向性を単純に対置することは不可能である。このような点は、センチメンタリズムとも内面的関係を有するとされるスミスの『道徳感情論』の綿密な分析によって解明されるべきものであろう。

しかし、キャンベルが論じたピューリタニズムからロマン主義への流れも、とりわけ「個性」の思想によって近代消費主義の重要な要素となっていることは否定できないように思われる。ここから結論されるのは、単にプロテスタンティズムの中に二つの潮流を区別するだけでなく、さらにルネサンスの要素とプロテスタンティズムの相互交渉を考えなければならないということである。この立場からの考察が筆者の今後の課題として残されたことになる。

## 註

- 1) 岩手大学人文社会科学部地域文化基礎研究講座編『人間・文化・社会』(1997年3月)、385-400頁。
- 2) Colin Campbell, *The Romantic Ethic and the Spirit of Modern Consumerism*, Basil Blackwell, 1987.本文中に、Cとして頁数を示す。ただし、煩瑣を避けるため単語レベルの引用からは頁数を省略した。
- 3) この問題、すなわち他者の苦痛に同感することがなぜ快をもたらすのかは、スミス『道徳感情論』も取り組んだ問題である。
- 4) 日本のキリスト教徒の間にもこの傾向が存在したことについては、内村鑑三『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』に、「感傷的キリスト教」として興味深い記述がある。内村自身は、この傾向に批判的であった。
- 5) ここに、十九世紀以降の芸術の顕著な特徴となり、またその展開の原動力ともなった「アヴァンギャルドとキッチュの弁証法」とでも呼ぶべき事態の根があるといえよう。この弁証法については、池田成一『『ポスト・モダン』と現代』(唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 創刊号』青木書店、1996年)でカリネスク『モダンの五つの顔』に依拠しながら論じた。
- 6) 見田宗介『現代社会の理論』(岩波書店、1996年)は、基本的にこのような方向に期待をかけている。
- 7) ここでのキャンベルの議論に問題があるとすれば、功利主義とロマン主義の一個人における同時存在を主張する余り、十九世紀においては基本的に、男性と女性の間でその役割が固定的に配分されていたというジェンダー問題が軽視されている点である。これについて例えば、ロザリンド・H・ウィリアムズ『夢の消費革命』(吉田典子訳、工作舎、1996年)。
- 8) 前々註の見田氏の著作においても、功利主義とロマン主義の対立が無批判に前提されていると言える。
- 9) 日本では、川北稔氏の一連の著作など。
- 10) たとえばフィッチーノは次のように言う。「ある男が目で人間を見、想像力でその似姿を心の中に作り、長いことかけてそれを修正しつくした時、

彼は神の光の内にある人間の理念を見られるまでに自分の知性をとぎすましたことになる。この時、神のきらめく光がこの男の知性の奥に突然差し込み、彼は人間の本性そのものを正しく理解するのである」（フィチーノ『恋の形而上学』左近司祥子訳、国文社、1985年、177頁）。

- 11) このような議論が、近代において「流行」をいち早く問題化したガルヴェ、およびそれを受け継いだ可能性のあるヘーゲルにみられることについては、池田成一「ガルヴェ『流行論』とヘーゲル市民社会論の成立」（『東北哲学会年報 第9号』1993年、15-28頁）を参照。